2　鎌倉市の維持及び向上すべき歴史的風致

(1)　社寺における祭礼・行事にみる歴史的風致

鎌倉時代、幕府及びその関係者は、神仏を敬い政治理念の中核にそれを据えるという宗教政策を進めた。そしてその具現化のため数多くの社寺を造営し、社寺が武家文化の創出及び発展の主な拠点となった。特に禅宗については、鎌倉幕府の主導によって様々な面で積極的に導入され、禅宗寺院は日本における中国文化の発信源として大いに繁栄し、その後様々な歴史の変遷の中で、日本独自の「わび・さび」と呼ばれる美意識の醸成につながっていった。また、鎌倉時代以降の歴代武家政権も、鎌倉を武家政権発祥の聖地として手厚く保護した。

幕府が置かれていた鎌倉地域には、今も数多くの社寺が点在しており、境内やその周辺では年間を通じて各種祭礼や伝統行事が行われ、市民や来訪者、信者や参拝者などを問わず数多くの人々が参加している。

鎌倉における祭礼や伝統行事の全てをここで取り上げることはできないため、その一部について事例を示していく。

表2-1　神社における祭礼等一覧（歴史的風致に関わる主な祭礼等）

月日		祭礼名	場所
1月	1日	歳旦祭（さいたんさい）	鶴岡八幡宮ほか
	1～7日	御判行事（ごはんぎょうじ）	鶴岡八幡宮
	4日	手斧始式	鶴岡八幡宮
	5日	除魔神事（じょましんじ）	鶴岡八幡宮
	6日	初神楽（はつかぐら）	八雲神社（大町）
	11日	潮神楽	五所神社（ごしょ）
	16日	小動神社例祭（こゆるぎ）	小動神社
	25日	初天神（筆供養）（はつてんじん　ふでくよう）	荏柄天神社
	巳の日	初巳祭（はつみさい）	銭洗弁財天（ぜにあらいべんざいてん）
2月	午の日	初午祭（はつうまさい）	佐助稲荷社・丸山稲荷社（さすけいなりしゃ）
	17日	祈年祭（きねんさい）	鶴岡八幡宮ほか
4月	2日	由比若宮例祭（ゆいわかみやれいさい）	由比若宮

月日		祭礼名	場所
６月	３日	葛原岡神社例祭（くずはらおかじん）	葛原岡神社
	第２日曜日	五所神社例祭	五所神社
	30 日	大祓（おおはらえ）	鶴岡八幡宮ほか
７月	第１日曜日～第２日曜日	天王祭（てんのうさい）	小動神社
	12 日以前の一週間	極楽寺八雲神社例祭	熊野新宮（くまのしんぐう）
	第２土曜日から３日間	八雲神社例祭	八雲神社（大町）
	第２日曜日から第３日曜日	八雲神社例祭	八雲神社（山ノ内）
	第２日曜日から第３日曜日	八雲神社例祭	山崎地区集会場
	第３日曜日から一週間	八雲神社例祭	八雲神社（常盤）
	海の日	石上さま例祭（いしがみ）	石上神社（御霊神社境内）
	25 日	荏柄天神社例祭	荏柄天神社
８月	立秋の前日から９日まで	ぼんぼり（雪洞）祭 立秋の前日：夏越祭（なごしさい） 立秋の日：立秋祭（りっしゅうさい） ９日：実朝祭	鶴岡八幡宮
	19～21 日	鎌倉宮例祭（かまくらぐう）	鎌倉宮
９月	14 日	甘縄神明宮例祭（あまなわしんめい）	甘縄神明宮
	14 日～16 日	例大祭 14 日：浜降式（はまおりしき）、宵宮祭（よいみやさい） 15 日：例大祭、神幸祭（しんこうさい） 16 日：流鏑馬神事（しんじ） 16 日：鈴虫放生祭（すずむしほうじょうさい）	鶴岡八幡宮
	18 日	御霊神社例祭（面掛行列）	御霊神社
11 月	23 日	新嘗祭（にいなめさい）	鶴岡八幡宮ほか
12 月	16 日	御鎮座記念祭（ごちんざきねんさい）	鶴岡八幡宮
	31 日	大祓	鶴岡八幡宮ほか

表2-2　寺院における仏教行事等一覧（歴史的風致に関わる主な仏教行事等）

月日		祭礼名	場所
1月	1～3日	鎌倉えびす	本覚寺（ほんがくじ）
	10日	十日えびす	本覚寺
	13日	護摩焚き供養（ごまだきくよう）	虚空蔵堂（こくうぞうどう）
	16日	閻魔縁日（えんまえんにち）	円応寺（えんのうじ）
	22日	太子講（たいしこう）	宝戒寺（ほうかいじ）
	28日	初不動（はつふどう）	明王院（みょうおういん）
4月	4日	時宗公毎歳忌（ときむねこうまいさいき）	円覚寺
	8日	降誕会（花まつり）（こうたんえ）	各寺
	8日	忍性塔特別参拝	極楽寺
5月	9日	子育鬼子母神祭（きしもじんさい）	大宝寺（たいほうじ）
6月	16日	瑞賢忌（ずいけん）	建長寺
7月	15日	梶原施餓鬼（かじわらせがき）	建長寺
	23～24日	地蔵まつり	宝戒寺
	下旬	献灯会（けんとうえ）	光明寺
	23～24日	開山毎歳忌（かいさん）	建長寺
8月	10日	黒地蔵縁日（くろえんにち）	覚園寺
	10日	四万六千日詣り（しまんろくせんにちまい）	安養院・杉本寺・長谷寺
	16日	閻魔縁日	円応寺
	旧暦7月15日	施餓鬼会（え）	各寺
10月	2～3日	開山国師毎歳忌	円覚寺
	12～15日	お十夜（じゅうや）	光明寺
	13日	お会式（えしき）	日蓮宗の各寺
11月	文化の日を含む3日間	宝物風入れ（ほうもつかざい）	建長寺・円覚寺

ア　神社における祭礼・行事

(ア)　鶴岡八幡宮における祭礼・行事

鶴岡八幡宮の歴史は、源頼義が康平６年（1063 年）に石清水八幡宮を鎌倉由比郷に勧請したことにはじまる。その後、鎌倉幕府を樹立した源頼朝が、鎌倉入りした治承４年（1180 年）に、先祖が勧請したこの由比若宮（元八幡）を、現在の位置に移して造営した。祭神は応神天皇（おうじんてんのう）、比売神（ひめがみ）、神功皇后（じんぐうこうごう）の三柱からなる八幡神で、宇佐神宮（大分県宇佐市）、石清水八幡宮（京都府八幡市）に筥崎宮（はこざきぐう）（福岡県福岡市）、鶴岡八幡宮のいずれかを加えて日本三大八幡に数えられる。

写真2-7　鶴岡八幡宮

境内には、上宮、摂社若宮、旗上弁財天社（はたあげべんざいてんしゃ）、白旗神社、丸山稲荷社、祖霊社（それいしゃ）及び今宮（およびいまみや）等の社殿の他、源平池などがある。現在の主要社殿等の配置は、天正 19 年（1591 年）作成の「修営目論見絵図（しゅうえいもくろみえず）」及び享保 17 年（1732 年）作成の「鶴岡八幡宮境内絵図」に描かれた配置とほぼ一致するが、この境内配置は、建久２年（1191 年）の大火後の鎌倉幕府による再興以来、鶴岡八幡宮の基本的な姿として踏襲されてきたもので、現在の境内及び社殿等は江戸時代の姿を継承している。

特に、江戸幕府の将軍家徳川氏は、自らを源氏の末裔（まつえい）と位置付けたため鎌倉を聖地として手厚く保護し、寛永元年（1624 年）には江戸幕府第二代将軍徳川秀忠が上宮、若宮ともに規模形式を一新した造替（つくりか）えを行ったことを初めとして、その後も、焼失による再建や定期的な修造などを継続的に行った。

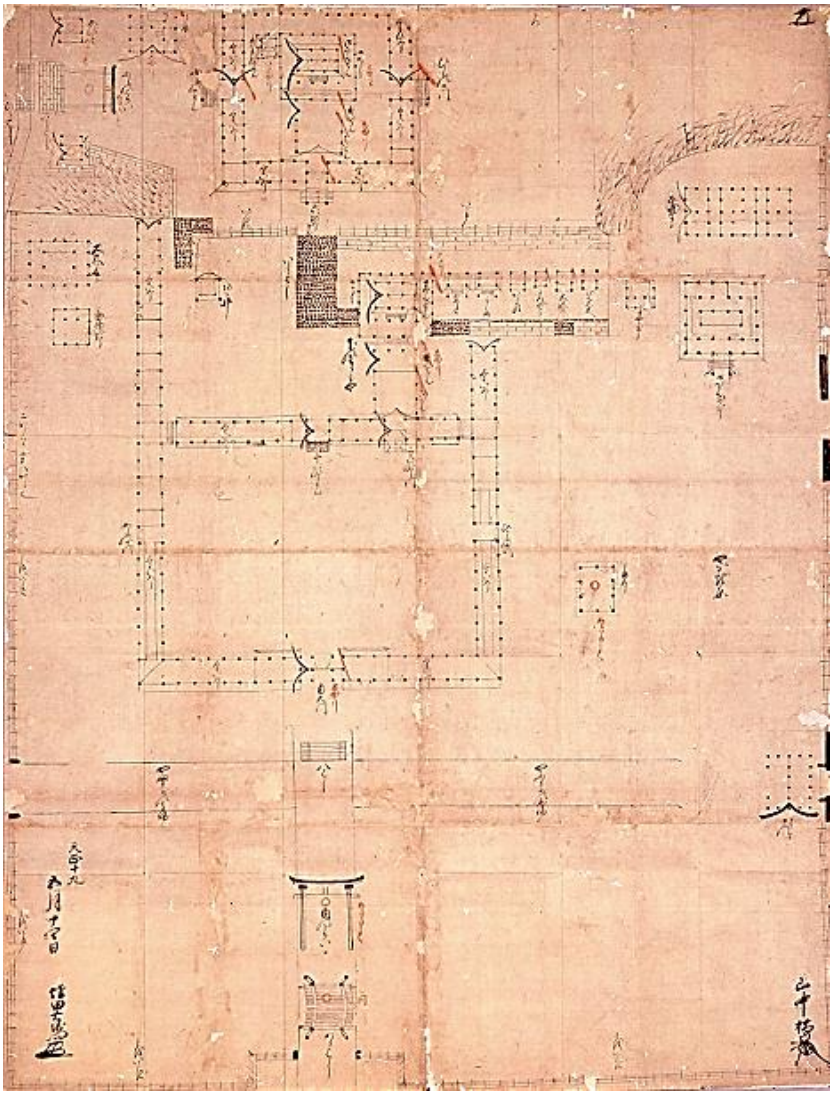

図2-2　鶴岡八幡宮修営目論見絵図

また、由比ヶ浜海岸から海を背にして市街地に目を向けると、正面中央の山裾に造営された鶴岡八幡宮は、幕府が所在していた鎌倉地域の中心に造営されていたことが分かる。寿永元年（1182 年）に、源頼朝の妻である北条政子の安産祈願を兼ねて造られた若宮大路は、鶴岡八幡宮三の鳥居から海岸に向かって、約 1.5 kmの長さで真っ直ぐに造られた参道であり、かつ幕府所在地の軸線となっていた。こうした鶴岡八幡宮及び若宮大路の「まちの中心と軸線」という位置付けは、中世以来、現在に至るまでまちづくり上の基本的構造として引き継がれている。

なお、鶴岡八幡宮境内は裏山の二十五坊跡（にじゅうごぼうあと）を含めて昭和 42 年（1967 年）に、若宮大路は昭和 10 年（1935 年）に史跡に指定されており、境内に建つ上宮、摂社若宮、末社丸山稲荷社本殿及び若宮大路南端付近に建つ石造の大鳥居（一の鳥居）は重要文化財に指定されている。

鶴岡八幡宮は、鎌倉幕府の守護神であると同時に、宗教政策の要として幕府の各種公式行事が執り行われるなど、最も重要な施設に位置付けられた神社で、武門の神として篤く信仰された。頼朝が始めたとされる初詣をはじめ、今もなお、年間を通じて様々な伝統行事が行われており、中でも幕府の最も重要な宗教行事としてはじめられた放生会の伝統をひく例大祭は、流鏑馬神事の奉納を含め、毎年９月に実施されている。

a　初詣

元日の朝や三が日に神社や寺院へお参りに行く「初詣」は、鎌倉時代に源頼朝が始め、全国に広がった。

鎌倉時代の歴史書である「吾妻鏡（あづまかがみ）」によれば、治承５年（1181 年）１月１日、「卯尅、前武衛、參鶴岳若宮給不及日次沙汰、朔旦被定當宮奉幣之日〈云云〉（卯の尅、前武衛、鶴岳若宮に参りたまふ。日次（ひなみ）に沙汰に及ばず、朔旦（さくたん）をもって当宮奉幣（とうみやほうべい）の日と定められると云々。）」とあり、頼朝が午前６時頃鶴岡八幡宮を訪れ、日柄などのことは関係なく１月１日の朝を鶴岡八幡宮へ奉幣する日と定めたと書かれ、これが初詣の始まりだといわれる。

初詣は、社寺に詣で新たな気持ちで神仏の前で手を合わせ、１年間の無事と幸福を祈る風習であり、地元の氏神様へ参拝することも多いが、近年では有名な社寺へ参拝する人も増え、鶴岡八幡宮にも遠方から多くの人が訪れている。

写真2-8　初詣（現在）

参拝者の中には、大晦日の夜から元日の朝にかけて「二年参り」をする人や夜が明けぬうちから訪れる人もおり、夜の闇に包まれた境内地の奥深くにぼんやりと浮かび上がる社殿に向かって、人々の列がゆっくりと幻想的に連なり歩を進める。夜が明けて昼

近くともなると、境内はさらに多くの参拝客で賑わうようになり、境内入口にそびえる石造りの三の鳥居から舞殿（まいでん）に続く参道、上宮へ続く石段には人々が帯のようになって進んで行く。また、社殿の周辺では、参拝を終えた人々が破魔矢（はまや）やお守りを求め、おみくじを引いた人の歓声が方々で湧き上がる。

写真2-9　初詣（昭和 33 年（1958 年））

鶴岡八幡宮では、三が日の参拝客が 200 万人を超える年もあるため、昭和 47 年（1972 年）からは、大晦日から三が日にかけて、周辺道路への自動車の乗入れを時間規制している。

元日の未明に鶴岡八幡宮を訪れる参拝者の中には、鶴岡八幡宮へ詣でた後、若宮大路を南へ下り、相模湾を臨む海岸に出て初日の出が上るのを待つ人々も多くいる。こうした活動は、現在初詣が全国的な風習となっている中で、三方を山に囲まれ一方が海に面した鎌倉の中心に鎮座する、鶴岡八幡宮への初詣の大きな特徴といえる。

写真2-10　初日の出

また、鶴岡八幡宮のほかにも、鎌倉宮、銭洗弁財天、建長寺、円覚寺、本覚寺、長谷寺、高徳院（鎌倉大仏）など、鎌倉の社寺には多くの人々が初詣に訪れる。

b　正月に関連する祭礼・行事

新しい年が明けたばかりの元日の午前５時より「歳旦祭」が行われる。「歳旦祭」は宮中および全国の神社で行われる年頭の祭儀で、新しい年を迎えたことを慶び、１年間の神のご加護を祈念する祭りである。終了（しゅうりょう）後の午前７時からは、舞殿にて神楽始式が行われ、八乙女（やおとめ）の舞が奉仕される。

写真2-11　手斧始式

１月４日には、「手斧始式」が行われる。手斧始神事は古来より重要な工事に先立って行われていた。鶴岡八幡宮創建の際にも「造営事始（ぞうえいことはじめ）」という名で儀式が行われたというが、今日では鎌倉全体の工事始めという意味を込めて執行されている。二ノ鳥居より神職の先導のもと、鳶職の木遣り音頭とともに御神木が段葛を進む。御神木は下拝殿（しもはいでん）前の祭場に安置され、神職による祭儀が行われた後、鎌倉の建築業者が儀式の責任者である「検知（けんち）」他の諸役を奉仕して、中世さながらの道具と所作で儀式を行う。

１月５日には「除魔神事」が行われる。午前 10 時より下拝殿で祭儀が執行された後、その西側で装束に身を包んだ射手が大的を射る神事で、源頼朝が「御的始（おまとはじめ）」「御弓始（おゆみはじめ）」と称する武家の事始を行ったことに由来する。弓矢には古来より魔を退ける力があるとされ、弓矢を以って除魔の神事を行うのは武家にとどまるものではない。なお参拝者の多くが求める破魔矢もこのような信仰と伝統に基づくものである。神事に用いられる的は５尺２寸（約 156cm）で、この神事が別名「大的式（おおまとしき）」といわれるのはこのためである。この大的の裏に「鬼」という文字を封じ込めて 15 間（27m）の距離から矢を射込む。その所作は古式に則って厳粛に行われる。

写真2-12　除魔神事

また、元旦より７日までの間、「御判行事」が執り行われている。御判行事とは、御神印（ごしんいん）を額に押し当てることによって、病気平癒、厄除、無病息災を祈念するものである。この御神印によって頭脳明晰になるともいわれ、受験を目前にした学生が行事所（ぎょうじしょ）に並ぶ姿も見られる。この御神印は通常は本殿の奥、御神座近くに奉安されているが、正月の時期に限り、行事所に移される。御神印を受けた人には、牛王宝印神符（ごおうほういんしんぷ）が授けられる。この神符には神威が込められており、古くは誓約書に使われていたものといわれ、鎌倉時代、戦場に向かう武士も出陣に際して、この御神印を授かったと伝えられている。

写真2-13　御判行事

１月 15 日には、正月に飾ったしめ飾り、古いお札やお守りなどを持ち寄り「お焚き上げ」をする行事、「左義長（さぎちょう）」が行われる。鎌倉では「ドンドンヤキ」、「サイトヤキ」など、地域によって様々な呼び方がある。以前は、市内の各地域にある道祖神（どうそしん）や庚申塔などの決まった場所で行われていたが、今では、人家が増えたため防火などの理由から、町中ではこのような火焚き行事を行えなくなり、鶴岡八幡宮のほか、鎌倉宮、大町八雲神社などの境内や公園で行われている。

写真2-14　左義長行事

この火で焼いた団子を食べたり、火にあたったりするとその年は病気にならない、燃やした炎が高く上がると字がうまくなるなどといわれている。13 日には、米の粉で赤・白・緑の「まゆ玉」と呼ばれる小さな団子を作り、14 日の朝に、この団子やミカンを木の枝にさして神棚に供え、「堅く実が結ばれるように。」とお参りしたものを 15 日に左義長の火で焼いて食べるのが慣わしである。

c ぼんぼり(雪洞)祭

ぼんぼり祭は、毎年８月の立秋の前日から９日まで行われる祭である。期間中、立秋の前日には「夏越祭」、立秋当日には「立秋祭」、そして源実朝の誕生日である８月９日には「実朝祭」が行われ、参道や流鏑馬馬場の両側には、鎌倉在住の作家・画家・書家をはじめ各界で活躍中の人々が描いたぼんぼりが、約 400 灯並ぶ。

これは昭和 13 年（1938 年）に、鎌倉に住む作家達による「鎌倉ペンクラブ」のメンバーが中心となってぼんぼりを並べたのが始まりであった。夕暮れになるとぼんぼりに火がともされ、見物人もたくさん集まり、境内は夜まで賑わう。

写真2-15 ぼんぼり祭(昭和 33 年(1958 年))

写真2-16 ぼんぼり祭(現在)

d 例大祭

例大祭は、毎年９月 14 日から 16 日までの３日間行われる、鶴岡八幡宮における最も大切な祭事である。

以前は旧暦の満月にあたる８月 15 日に行われており、吾妻鏡にも文治３年（1187 年）８月の欄に「十五日　癸未　鶴岡放生會也二品、御出（中略）有流鏑馬（15 日、鶴岡の放生会なり。二品（源頼朝）御出。（中略）流鏑馬あり）」との記述が残されている。

14 日の早朝に神職が由比ヶ浜において禊を行い、15 日に例大祭が行われる。同日の神幸祭では神輿に神様を遷し、数百メートル続く行列が若宮大路を歩く。最終日の 16 日には流鏑馬神事が行われ、多くの参拝者が訪れる。境内には三日間、鎌倉囃子の音が流れ、参道の両側に出店が並ぶ。また、茶会や舞踊・武道の奉納もある。

(a) 浜降式（９月 14 日）

前日に由比ヶ浜の滑川河口西海岸に忌竹2本を立てて注連縄を張り、14 日の早朝、宮司以下神職が白衣・白袴・白足袋をつけて海岸においてお祓いを行い、海中に入って身を清める禊を行う。その後、藻塩草（アマモ）を持ち帰り、社頭に

写真2-17 浜降式

掲げる。夕方から祭を迎える儀式「宵宮祭」を行う。

(b)　例大祭（９月 15 日）

宮司以下神職と雅楽（ががく）を奏する伶人（れいじん）・巫女（みこ）・八乙女・献幣使（けんぺいし）・随員（ずいいん）・氏子総代（うじこそうだい）などによって厳かに行われる。神前には鈴虫も供えられ、秋らしい虫の音が響く。

(c)　神幸祭（９月 15 日）

午後に氏子の若者が、室町時代の御輿３基を上宮から担ぎ下ろし、宮司以下神職・神馬（しんめ）・提灯・太鼓・盾・弓矢などの行列が、若宮大路を二の鳥居まで進む。

二の鳥居の下には御旅所（おたびしょ）が設けられ、８人の少女が、緑の千早（ちはや）と緋の袴という美しい姿で、「八乙女の舞」を奉納し、本宮に戻る。

写真2-18　神幸祭（境内）
（現在）

写真2-19　神幸祭（境内）
（昭和 33 年（1958 年））

写真2-20　神幸祭（若宮大路）
（現在）

写真2-21　神幸祭（若宮大路）
（昭和 33 年（1958 年））

(d)　流鏑馬神事（９月 16 日）

馬に乗って弓を射ることを「騎射」というが、騎射三物（流鏑馬、笠懸（かさがけ）、犬追物（いぬおうもの））のうち流鏑馬は、馬を馳せながら矢を射ることから「矢馳せ馬（やばせうま）」と呼ばれ、時代が下るにつれて「やぶさめ」といわれるようになったと伝えられている。

鎌倉の流鏑馬神事は、源頼朝が文治３年（1187 年）８月 15 日に鶴岡八幡宮の放生会で奉納した流鏑馬が始まりとされている。

こうした中、鎌倉では４月の鎌倉まつり、９月の鶴岡八幡宮例大祭において流鏑馬神事が行われているが、例大祭における流鏑馬神事は、「神酒拝戴式（しんしゅはいたいしき）」に始まる。

まず拝殿で儀式を行い、「馬場入りの儀」として神職の先導で順序・作法を守って馬場を一巡する。その後、鎌倉武士の狩装束に身を整えた射手が、紅白の扇の合図で馬場に駆け込み、鏑矢を抜いて約 70m 間隔で三箇所に立てられた正方形の杉板の的を次々に射抜き、そのまま駆け抜けて行く。３人の騎射が終わると、装束を軽装に改め、やや小形の的板で、刃のついていない鏑矢を用いる平騎射が十数騎行われる。

写真2-22　流鏑馬神事（例大祭）
（昭和 34 年（1959 年））

写真2-23　流鏑馬神事（例大祭）
（現在）

(e)　鈴虫放生祭（９月 16 日）

例大祭で神前にお供えした鈴虫を舞殿において雅楽の演奏と巫女による神楽舞を奉納した後、境内の林に放つ行事である。「放生」とは生物を放つことで、命の大切さを伝える儀式ともいえる。

e　祈年祭と新嘗祭

祈年祭は、古くは「稔（みの）り」を表す「とし」を願う祭として「としごいのまつり」と呼ばれていたことからも分かるように、春のはじめに一年の五穀豊穣を祈る祭であり、現在も全国各地の神社で行われている。

鶴岡八幡宮においては毎年２月 17 日に商工業も含めすべての産業の発展、繁栄を祈っている。

そしてこの祈年祭に対応する秋の収穫を祝う祭が「新嘗祭」で、鶴岡八幡宮では、市内の農家から献納された稲をはじめ、野菜や果物などを神前に供え、八幡神と土地の神様に一年の五穀豊穣を感謝する。

農耕民族であった日本人の精神性の源に通じる「祈年祭」と「新嘗祭」は、重要な神事といえる。

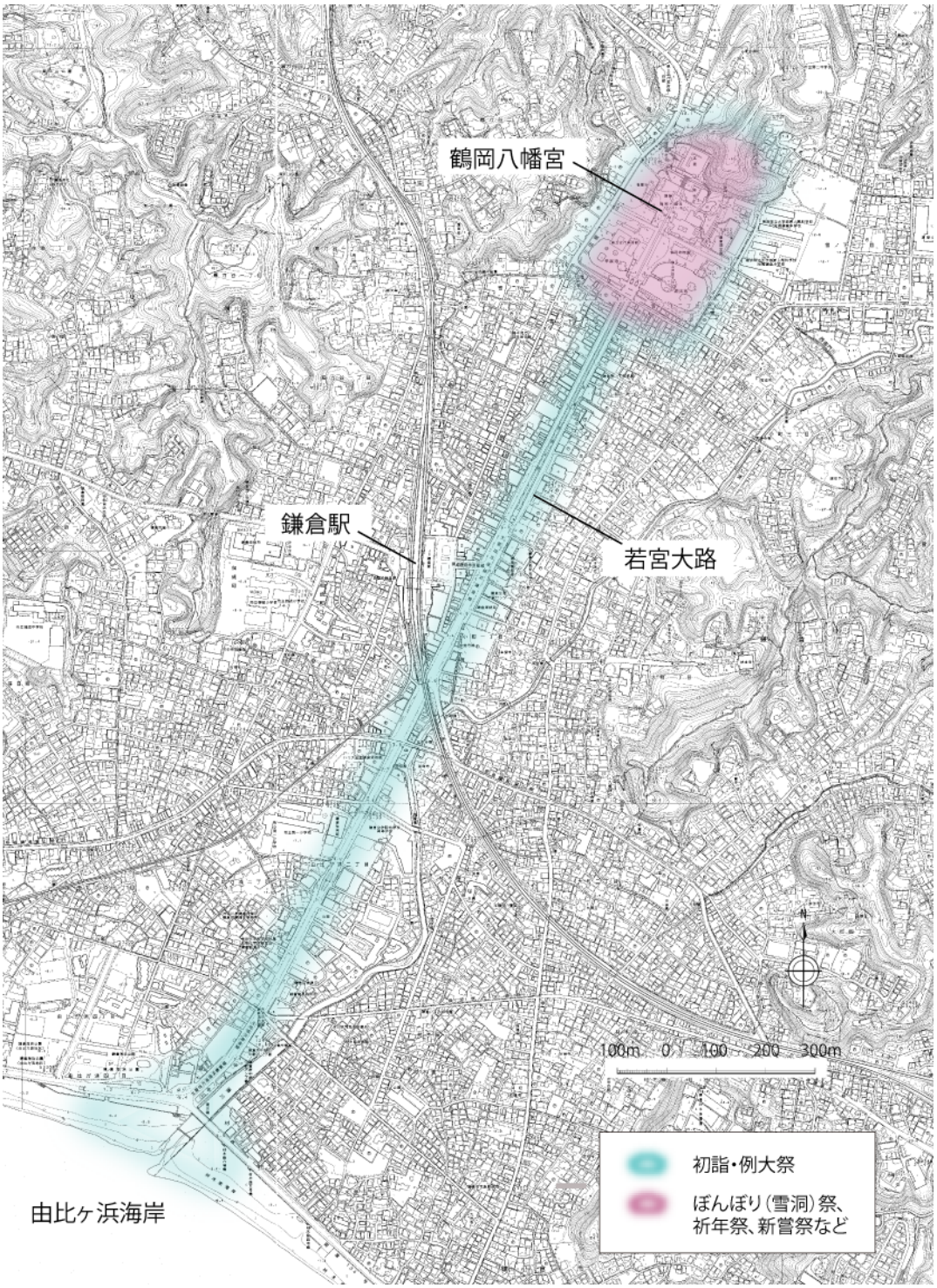

図2-3　鶴岡八幡宮における祭礼・行事の市街地への広がり

(イ) 鎌倉の神社におけるその他の祭礼・行事

a 年の初めの祭礼・行事

初詣の始まりの地である鶴岡八幡宮をはじめ、鎌倉ではどの社寺にも新たな年の初めに多くの人々が訪れる。その中でも鎌倉宮の獅子頭、銭洗弁財天のお宝銭(たからせん)が縁起物として知られている。

写真2-24 鎌倉宮

鎌倉宮は、明治２年（1869 年）に明治天皇が創建した神社であり、鶴岡八幡宮から東へ約１kmの場所に位置している。緑に囲まれた境内の入口には、石造りの鳥居がそびえ立ち、その下をくぐり抜けると広々とした空間に石畳の参道が延びている。正面に見える石段を上がり、二つ目の鳥居を抜けた先には、静寂の中に拝殿、本殿が立ち並んでいる。

祭神は、後醍醐天皇の皇子で鎌倉幕府打倒に貢献した大塔宮護良親王(おおとうのみやもりながしんのう)であることから、鎌倉宮は大塔宮とも呼ばれている。初詣に訪れた参拝客の多くが求める獅子頭は、護良親王が戦いに臨む際、兜の中に厄を食べ幸せを招くといわれる獅子頭のお守りを忍ばせたとの言い伝えによるものである。

銭洗弁財天は、JR 鎌倉駅から源氏山公園へと向かう急な坂道の途中に位置し、正式名を銭洗弁財天宇賀福神社(うがふくじん)という。坂道の切岸に口を開く岩のトンネルを進み、さらにその先の木の鳥居を抜けると広々とした空間が開け、右手には本殿と弁財天を祀る洞窟が見える。

銭洗弁財天には、巳の月の巳の日の夜中に宇賀福神が源頼朝の夢に現れ、その教えに従いこの地に宇賀福神を祀ったところ、平安な世が訪れたとの言い伝えがある。その後、正嘉元年（1257 年）に北条時頼が、ここから湧き出る水で銭を洗い清めれば福銭(ふくせん)となる、と自ら銭を洗い祈願したことがはじまりとなり、今でも多くの人々が年間を通じてこの地を訪れ、幸福利益を願いながら故事に倣って銭洗いを行っている。特に新年の「初巳の日」は、多くの初詣客で賑わっている。

写真2-25 銭洗弁財天

写真2-26 銭洗弁財天
（昭和 33 年(1958 年)）

b　初神楽

１月６日、大町の八雲神社では、年のはじめに際し、世の平和と氏子の繁栄を願って鎌倉神楽が行われる。当日境内に設けられた神楽の山は色とりどりの紙垂で飾られ、大釜には湯が沸かされる。

まず社殿内において祭儀が行われた後、神楽へと移る。初神楽の次第としては、祈念の後、打囃、初能（はのう）、御祓（おはらい）、御幣招、湯上、中入（なかいり）、掻湯、笹舞（湯座）、弓祓（いはらい）、剣舞毛止幾の十座が奉納される。

表2-3　八雲神社（大町）初神楽での鎌倉神楽の次第

1	打囃	神楽を執り行う事を神々に祈念し、一通りの楽曲を奏して調子を合わせ、奉仕者、参列者の心をたかめる。
2	初能	白米を四方に散供し、神楽が滞りなく進行することを祈念し清めの舞を奉納する。
3	御祓	斎場の四方と湯釜を祓い、旗を釜の両脇に立て、神酒を注いで清める。
4	御幣招	産土大神（うぶすなのおおかみ）・火の神・水の神を招く。舞の後、御幣を振り神々の恩恵を参列者等に授ける。
5	湯上	清められた湯に笹を浸し、桶に湯を汲んで神前に捧げる。
6	中入	神楽の前段を終え、後段の神楽に備える。参列者は神酒を拝戴する。
7	掻湯	煮え立つ釜の中を御幣でかき回し、引き抜いた際に跳び上がる「湯玉」で豊凶を占ったという。
8	笹舞（湯座）	湯に笹を浸しこれを振りかける所作を行う。飛び散った湯がかかると、一年間無病息災で過ごせるといわれる。
9	弓祓（射祓）	四隅に矢を放ち、邪気を射祓う。最後に神座に向けて射定めるが、神座には悪霊がいないため、弦だけ引かれ、矢は収められる。放った矢を授かると運が開けると伝えられる。
10	剣舞毛止幾	赤い天狗面を付け鉾を持った「剣舞」が、天下泰平を願い邪気を払う。黒い山の神の面を付け、大きな杓子を持った「毛止幾」が途中から現れ、天狗の所作をまねたり、滑稽な動きで笑いを誘い、雰囲気を和ませる。散供されたみかんを食べると風邪を引かないといわれる。

c　初天神

鶴岡八幡宮の北東に位置する荏柄天神社では、１月 25 日に「初天神」という縁日を行い、同日に筆などを焚き上げる「筆供養」も行われている。

源頼朝は、長治元年（1104 年）創建の天神社を幕府鬼門の守護神と位置付け、社殿を造営し荏柄天神社とした。荏柄天神社は、武家の誓約を司る神として、鶴岡八幡宮とともに江戸幕府に至る武家政権の庇護をうけた。本殿

写真2-27　荏柄天神社本殿

は 14 世紀にさかのぼる建築物と考えられており、重要文化財として指定を受け、また、境内も史跡の指定を受けている。

荏柄天神の祭神、菅原道真は学問の神として全国的に信仰を集めてきた。毎月 25 日は「天神の日」とされており、その年初めての「天神の日」である 1 月 25 日は「初天神」という天神をまつる縁日が行われ、合格祈願のお札を求める人や、絵馬(えま)を納める人などが多く訪れる。

また、同日には「筆供養」も行われ、まず社殿で祝詞(のりと)をあげて初天神の祭事を行った後、社殿の前に置かれた梅鉢という青銅製の鉢の上で参拝者が持参した使い古しの筆や鉛筆に斎主(さいしゅ)が火をともし、お焚き上げを行い、学力の向上や字の上達を祈る。

d 天王祭(祇園祭)

市内に数箇所ある八雲神社に代表されるように、鎌倉には牛頭天王(ごずてんのう)やスサノオノミコトを祀る神社が多く見られ、夏には各所で祇園祭（天王祭）が行われる。鎌倉地域では「お天王さん」といえば神輿のことであり、天王唄を歌いながら神輿が巡行する。

夏に行われるのは、祇園神と祇園祭に由来するものである。祇園祭の行われる旧暦 6 月は疫病(えきびょう)流行の兆しをみせる時であり、また、農村では稲に害虫が付きやすい時期でもある。このころに牛頭天王をまつり、鎮めようとしたのが始まりである。

なお、牛頭天王とスサノオノミコトは同一視されており、現在、市内では複数の八雲神社や腰越の小動神社などがスサノオノミコトを祭神としているが、その中で現在も続いている代表的な祭は次のとおりである。

なお、小動神社の天王祭については、海との結び付きが深いことから、「(2)海にまつわる伝統行事にみる歴史的風致」において記載する。

(a) 八雲神社例祭(大町)神幸祭

八雲神社は、平安時代永保年中（1081～1084 年）源 新羅三郎義光(みなもとのしんらさぶろうよしみつ)の勧請と伝えられている。後三年合戦に奥州鎮護の任務にあたった兄八幡太郎義家の苦戦が伝えられる中、義光は力添えのために官職を辞して現地に向かうが、鎌倉に入ると悪疫により苦しむ人々を目の当たりにし、厄除けのために京都の祇園社を勧請し、土地の守護神として崇めた。すると悪疫はたちまち退散し、人々は難を逃れたといわれており、八雲神社が鎌倉の「厄除さん」といわれる由縁でもある。

写真2-28 神幸祭

八雲神社例祭で執り行われる「神幸祭」は、古くは 7 月 7 日と 14 日の両日に行われていた。享徳 3 年（1454 年）の奥書がある「鎌倉年中行事」には、7 月 7 日に関

東官領足利成氏の屋敷へ神輿が渡御し、神楽を奏した奉幣の式が行われ、成氏一家は桟敷を構えて７日及び 14 日にこれを見るとの記載があり、室町時代には既に執り行われていたと考えられる。

現在の行列は、囃子車（鎌倉囃子）、大太鼓、猿田彦、神主、総代、一番神輿の順に行列をなし、この地域を練り歩いた後、辻の神酒所で待機していた３基の神輿とともに４基の神輿が神社へと進んでいく。

その時に唄われる「天王唄」は、鶴岡八幡宮創建の際に「伊勢音頭（木遣音頭）」を唄いながら用材を浜から運んだことに端を発し、今に唄い継がれているといわれている。また、この間に氏子の乳幼児が保護者に抱かれて神輿の下をくぐり、無事な成長を祈願する「みこしくぐり」の信仰が今も行われている。

夜になると４基の神輿は独特の「神輿ぶり」を披露することとなる。お祓いを受けた揃いの袢天姿の担ぎ手によって、掛け声とともに提灯を付けた４基の神輿は勢いよく進み、途中一旦停止した４基の神輿が横一列になって再び動き出す。その勇壮華麗な様に担ぎ手も拝観する者も「悪疫退散招福繁盛」が約束されると語り継がれている。

(b)　熊野新宮における八雲神社（極楽寺）例祭

極楽寺二丁目に鎮座する熊野新宮に関しては、「忍性菩薩行状略頌」に文永６年（1249 年）草創とあり、また永仁６年（1298 年）の社殿焼失後、正安２年（1300 年）に熊野大神を勧請し熊野新宮としたと伝わっている。関東大震災で村内の八雲神社と諏訪神社が倒壊すると、この二社を昭和３年（1928 年）に合祀し、現在の姿となった。八雲神社の創建は明らかではないが、古くより極楽寺地区の産神（うぶがみ）として崇敬されていた。

写真2-29　熊野新宮

７月に入ると極楽寺地区は神輿一色の１週間を迎え、内三日ある神輿渡御の際には、多くの担ぎ手が「ドッコイ・ドッコイ」の掛け声を挙げ、笛太鼓も相まって大いに賑わう。

(c)　八雲神社（山ノ内）例祭

山ノ内の八雲神社は、もとは「牛頭天王社」と称したと伝わり、例祭は、中断されていた時期もあったが、昭和 42 年（1967 年）ごろから再開した。古くから山崎の八雲神社の神輿とともに巡行していたことから「出会い祭」、「行合祭（ゆきあいまつり）」などと呼ばれ、７月中旬に行われている。

写真2-30　八雲神社（山ノ内）

山ノ内の神輿は男神輿、山崎の神輿は女神輿と称され、

それぞれの地域を出発した後、北鎌倉駅前で出会う。しばらく山崎側に共に進み、神職による「出会い神事」が行われると、山崎の神輿に腹帯が巻かれる。神事が行われた後、また２基は共に進み、山ノ内の神輿が山崎の神輿を小袋谷（こぶくろや）まで見送ると、それぞれの地域に戻って行く。また、現在は行われていないが、古くは御霊神社と同様に面掛行列が行われていたことから、これに用いられていた市指定文化財の面と衣装が伝わっており、例祭に併せて面の展示が行われている。

写真2-31　神輿の出会い

写真2-32　女神輿（左）と男神輿（右）

写真2-33　面の展示

イ　禅宗寺院における仏教行事

（ア）　建長寺における開山毎歳忌

建長寺は、建長５年（1253 年）に鎌倉幕府第五代執権北条時頼が、中国の禅僧蘭渓道隆を開山に迎えて創建した我が国初の禅宗専門道場であり、我が国に禅宗が定着する契機をなした最も重要な禅宗寺院といえる。鶴岡八幡宮と並び鎌倉幕府による神道と禅宗を両輪とする宗教政策の中心的施設であったと同時に、当時の中国文化受容の最大の拠点として、鎌倉における武家文化の成立と発展に大きく貢献した。現在は臨済宗建長寺派大本山巨福山建長興国禅寺と号する。

仏殿前庭及び方丈庭園は昭和７年（1932 年）に史跡及び名勝の指定を受けており、６件の重要文化財（建造物）のほか、国宝に指定された建長７年（1255 年）鋳造の梵鐘など多くの文化財を有している。

昭和 41 年（1966 年）に史跡に指定された境内はかつて「地獄谷」と呼ばれた南に開く谷戸の内部にあり、谷開口部付近の総門から約 100 mの地点に壮大な山門を構え、そこから谷の中軸線に沿って仏殿前庭、仏殿、法堂、唐門、方丈、方丈庭園等が一直線に配置されている。狭い谷間を造成した中に営まれた一直線上の伽藍は、我が国における初期大禅宗寺院伽藍の典型であると同時に、後背山稜部と一体となって静寂な宗教空間を形成しており、鎌倉固有の社寺景観を現している。主要伽藍の東西の両脇、さらに北東へ谷が入り込む区域には多くの塔頭が営みを続けており、その中でも仏殿前庭から南東に入る小谷に位置し、開山を祀る西来庵の昭堂と大覚禅師塔は特に重要な存在である。また、北東の尾根線付近には、約 50 穴から成る朱垂木やぐら群が存在する。

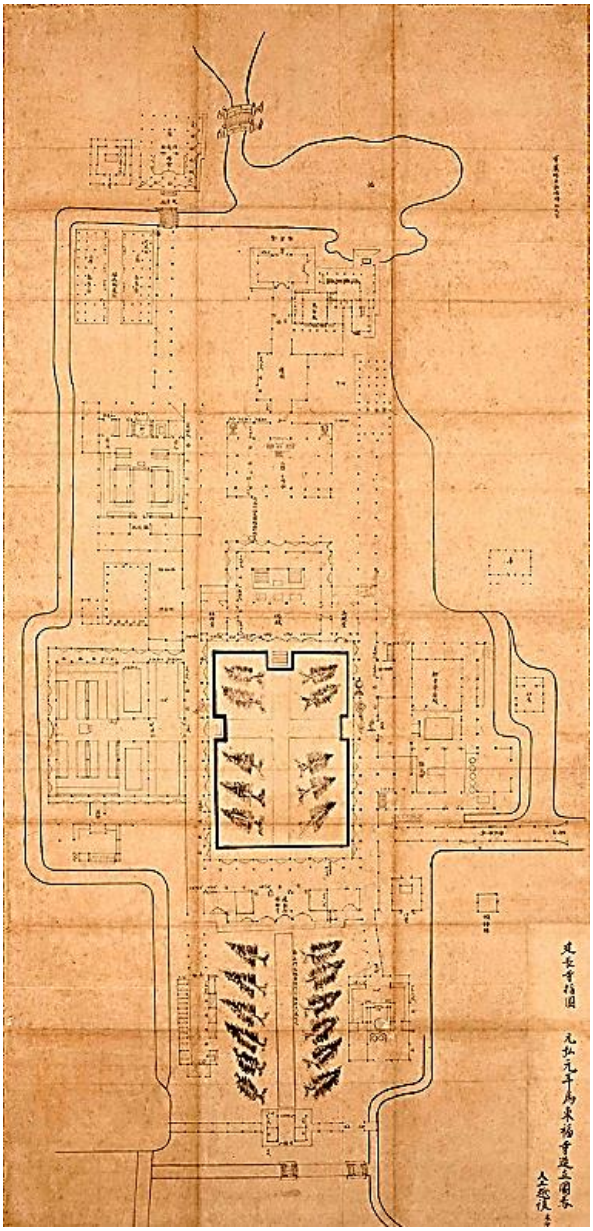

図2-4　建長寺伽藍指図

このような境内及び伽藍の配置は、「建長寺伽藍指図」（元弘元年（1331 年）作成）や「建長寺境内絵図」（延宝６年（1678 年）作成）などに描かれた中国禅宗寺院を模した配置を基本的に踏襲しているが、鎌倉時代から室町時代

にかけての建長寺は、中国南宋五山に倣った、壮大な伽藍を構えた大禅宗寺院として威容を誇った。創建後の建長寺は、度重なる火災や暴風によって伽藍の焼失、倒壊といった被害を受けているが、その都度、鎌倉幕府や後続した武家政権によって復興が図られた。特に、江戸幕府は手厚い保護を実施し、正保４年（1647 年）には芝増上寺からの唐門や仏殿の移築、延宝６年（1678 年）には徳川光圀による「建長寺境内絵図」の寄進の他、数次に及ぶ修造を援助した。現在の主要伽藍は、この江戸幕府を中心とする修造による。

写真2-34 建長寺 仏殿

写真2-35 建長寺 梵鐘

７月 23 日と 24 日に行われる「開山毎歳忌」は、開山の蘭渓道隆の法要で、23 日の午前 10 時には、山門の楼上で羅漢講式という特別法要が行われる。午後２時になると、梵鐘の鐘の音が響いて全山の僧が仏殿に集まり、読経（どきょう）が始まる。安置されている蘭渓道隆像を輿に乗せて白衣の８人が担ぐ。御詠歌講（ごえいかこう）中の御詠歌が唱えられ、たくさんの信者が手を合わせ見守る中を、僧衆の鳴らす銅鉦鼓や太鼓などの楽奏の先導で、僧の行列が静かに奥の法堂に蘭渓道隆像を運び入れる。

写真2-36 開山毎歳忌（建長寺）

24 日には法要に引き続き、方丈で正式な食作法（しょくさほう）による四ツ頭の斎座（さいざ）が厳かに執り行われる。また、「万人講施餓鬼会（ばんにんこうせがきかい）」も営まれる。新盆の家の霊や先祖の霊を慰めるもので、多くの参拝者が訪れる。午後になると、僧が法堂に揃い、堂内外の鐘が高く低く響く「打ち合わせ」の後、読経が行われ、前日と同じように蘭渓道隆像を法堂から仏殿に戻す。

（イ） 円覚寺における開山国師毎歳忌

円覚寺は、弘安５年（1282 年）に鎌倉幕府第八代執権北条時宗が、モンゴル襲来時の犠牲者を敵味方の区別なく弔うため、中国の禅僧無学祖元を開山に迎えて創建した禅宗専門道場であり、建長寺と並んで我が国に禅宗が定着する契機をなした重要な禅宗寺院であるとともに、鎌倉幕府による神道と禅宗を両輪とする宗教政策の中心であり、当時の中国文化受容の最大の拠点として、武家文化の成立と発展に大きく貢献した。現在は臨済宗円覚

寺派大本山瑞鹿山円覚興聖禅寺と号する。

円覚寺境内は昭和42年（1967年）に史跡に指定され、仏殿の前庭、白鷺池及び妙香池は昭和7年（1932年）に史跡及び名勝の指定を受けている。

境内は、南に開く谷戸が雛壇状に造成されており、北東方向へ約500m入り込む谷戸の入り口横に白鷺池、そこから一段高くなった位置に総門を構える。総門を入ると約300mの間に諸伽藍及び妙香池が一直線上に配置されている。建長寺同様、狭い谷間を造成した中に営まれた直線上の伽藍は、我が国における初期大禅宗寺院伽藍の典型であると同時に、後背山稜部と一体となって静寂な宗教空間を形成しており、鎌倉固有の社寺景観を現出している。また、総門の北東約350mの位置、東西側及び北側に迫る山稜部の裾を切り下げた空間には15世紀前半の建築と推定される国宝の舎利殿、山門の東側約100mの丘陵上には正安3年（1301年）鋳造の国宝の梵鐘が所在する。

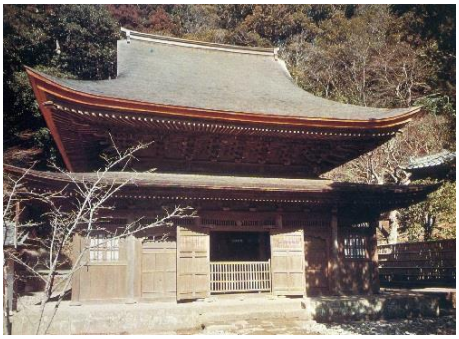

写真2-37　円覚寺　舎利殿

写真2-38　円覚寺　妙香池

円覚寺は、鎌倉幕府の庇護の下に境内整備が進められ、鎌倉幕府滅亡後も室町幕府等の時の権力者の保護を受け、14世紀前半には、大伽藍を備えた最盛期を迎えた。当時の状況を描く正慶2年（1333年）～建武2年（1335年）頃作製の「円覚寺境内絵図」によれば、主要伽藍が中軸線上に並び、建長寺と同様に中国禅宗寺院を模して造営されたことが明らかである。江戸時代には江戸幕府の保護による伽藍の復興

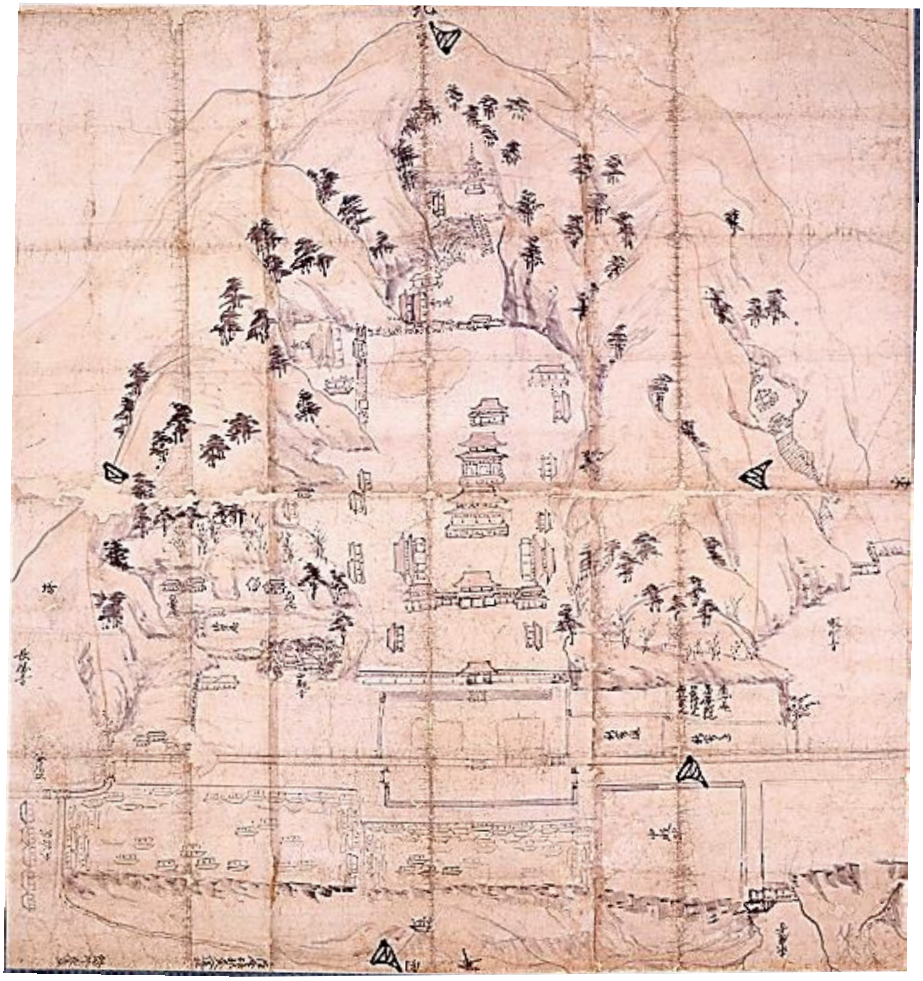

図2-5　円覚寺境内絵図

が進められ、18 世紀後半には現在の姿に整備された。

「開山国師毎歳忌」は、円覚寺開山の無学祖元を供養する法要で、10 月 2 日から 3 日に行われる。10 月 3 日には本山や末寺から多くの僧や信者が集まり、舎利殿や仏殿で無学祖元の法要を盛大に行う。その後、無学祖元の画像を掲げて霊膳をお供えし、参列した僧が開山とともに厳粛に会食する。

写真2-39 開山国師毎歳忌（円覚寺）

（ウ） 建長寺・円覚寺における宝物風入れ

宝物風入れは、毎年 11 月 3 日の「文化の日」の前後に、建長寺と円覚寺で行われる恒例行事で、両寺の宝物を、虫干しを兼ねて展示する。

なお、鎌倉国宝館が寄託を受けている宝物については、この期間両寺に返却されるが、「鎌倉国宝館庶務日誌」の昭和 5 年（1930 年）11 月 14 日の項に「円覚寺宝物風入ニ陳列ノタメ…自働車ヲ雇ヒ左記ヲ同寺ニ運搬セシム」、同月 17 日の項に「宝物風入ノタメ一時返戻シタル国宝ヲ再ビ本館ニ搬入ス」と詳細な記述があることからも、鎌倉国宝館の建設当初から同様のやりとりが行われていたことが分かる。

写真2-40 宝物風入れ（円覚寺）

期間中、建長寺では、創建以来 750 年にわたる国宝、重要文化財など宝物約 150 点の展示を行い、円覚寺では収蔵している数百点の文化財の展示と「国宝舎利殿特別公開」を行っている。

（エ） 建長寺・円覚寺における参禅

建長寺、円覚寺とも、現在も禅僧の厳しい修行が継続されている他、一般の参禅も盛んに行われている。

特に、円覚寺では、近代以降、在家者（ざいけしゃ）（出家せずに仏道に帰依する者）に対する布教活動を盛んに進め、居士禅の普及に努めている。

禅について英語で著し、日本の禅文化を海外に広くしらしめた仏教学者の鈴木大拙（すずきだいせつ）や小説家の夏目漱石など多くの著名人が円覚寺において参禅していることも知られている。

また、建長寺では、日時を決めて禅僧が英語による坐禅指導を行っている。

写真2-41 日曜坐禅会（円覚寺）

ウ　鎌倉の寺院におけるその他の仏教行事

(ア)　十日えびす

十日えびすの行われる本覚寺の境内は、「吾妻鏡」に見られる夷堂（えびすどう）の地といわれている。当初は天台宗の寺院であったが、日蓮がここに留まったことから改宗し、日蓮宗の寺院になったと伝わっている。

写真2-42　鎌倉えびす

えびすというと、一般的にはにこやかな顔で右手に釣竿、左手に鯛を持っている姿で知られているが、本覚寺のえびすは源頼朝が幕府の守り神として祀ったもので、岩に腰をおろして手を合わせ、厳しい顔をしている。

鎌倉・江の島七福神の一つである「えびす神」をまつる本覚寺では、正月の三が日に「鎌倉えびす」、１月９日に「宵えびす」、10 日に「本えびす」が行われる。

夷堂では祈祷の声が絶え間なく続き、金色の立烏帽子（たてえぼし）を付けて美しく着飾った福娘の姿が境内のあちこちに見られ、福銭やお神酒が参拝者に振舞われる。参拝者は商売繁盛を願い、笹を持って縁起物の授与品を付けてもらう。

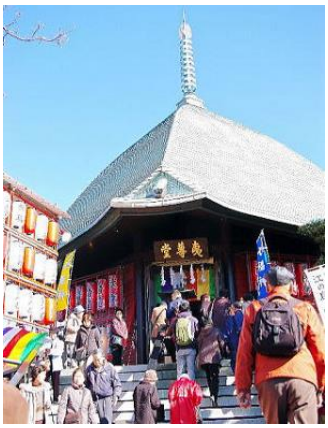

写真2-43　本えびす

(イ)　降誕会（花まつり）

降誕会は「花まつり」・「灌仏会（かんぶつえ）」・「仏生会（ぶっしょうえ）」・「竜華会（りゅうげえ）」・「誕生会（たんじょうえ）」などといい、釈迦が生まれた４月８日に各寺院で行われる。この行事は、釈迦が生まれたときに天から竜が下って来て香湯（こうとう）へ入浴させたという伝説がもとになっている。寺では花御堂（はなみどう）という様々な花で飾った小さいお堂を作り、その中に甘茶をたたえた水盤を置き、中央に誕生したときの姿の釈迦像を安置する。参詣者はその釈迦像に甘茶をかけて入浴させる。寺ではたくさんの甘茶を作り参詣者に分ける。

鎌倉の寺院の中では、極楽寺の花まつりが特に著名である。極楽寺は、正元元年（1259 年）に、第二代執権北条義時の三男で、第五代執権北条時頼の補佐を行うなど幕府内で重きをなした北条重時が、日本人律宗僧の忍性を開山に招いて創建した。現在は、真言律宗の寺院で、霊鷲山感応院極楽律寺（りょうじゅせんかんのういんごくらくりつじ）と号する。

中世には子院 49 箇院を有する大寺院であったが、現在の境内は、北西から南西の周囲を山陵に囲まれた一画に営まれ、山門から参道を約 50m進んだ場所に、伽藍が配置されている。また、西側の山稜部の裾には、開山の忍性及び第二代順忍（じゅんにん）の墓塔である大型の五輪塔２基が安置されている。

極楽寺開山の忍性は、布教活動を行うとともに、極楽寺を拠点に弱者・貧民救済の事業や、道路や橋の建設及び井戸の掘削などの土木事業にも力を注いだ。その功績により極楽寺は、和賀江嶋の管理・徴税などの権利を幕府から与えられるなど、鎌倉幕府において重要な役割を果たした。

写真2-44 極楽寺 山門

極楽寺においては、花まつりに併せ、奥ノ院にある極楽寺開山の墓である重要文化財「忍性塔」の特別公開を行っている。一度境内を出て住宅街を進み、階段を上った丘の上に忍性塔がある。忍性塔は高さ 3.9mの大型の五輪塔で、参拝者からはその大きさを見て感嘆の声が挙がる。

なお、当初の史跡指定は忍性墓の範囲のみであったが、平成 20 年（2008 年）に旧境内が追加指定された。

（ウ） 施餓鬼会

餓鬼とは仏教上の言葉で、生前欲ばりで貪るように食べていた人が死ぬと行くといわれている餓鬼道に生まれ変わったものをいう。餓鬼は常に飢えと乾きに苦しみ、食べ物や飲み物を手に取ると火に変ってしまうので決して満たされることがないといわれる。そのような餓鬼や、供養する人がおらず無縁となった霊に食べ物や飲み物を施し、経をあげる法要を「施餓鬼会」という。施餓鬼会は旧暦の 7 月 15 日に行われる。

施餓鬼会の日、寺では施餓鬼壇に亡くなってから初めて迎える新盆の人の位牌と、先祖代々や無縁仏の位牌を飾り、新鮮な野菜や果物をあげて供養する。新盆の時は三角の袋に米を入れ、ほかに麻ひも・ぞうり・扇子をこの世に戻る旅の支度として備えるところもある。

鎌倉では、8 月 10 日に「黒地蔵縁日」とともに行われる、覚園寺の施餓鬼会が特に著名である。

覚園寺は、建保 6 年（1218 年）に第二代執権北条義時が建てた薬師堂を、永仁 4 年（1296 年）に第九代執権北条貞時が元の討滅を祈願して寺院に整備したもので、諸宗兼学の寺院として繁栄した。

写真2-45 覚園寺 薬師堂

創建当初は、多くの伽藍を備えた大規模かつ荘厳な寺観を呈していたが、現在の境内は、谷の最奥に奥行約 380m、最大幅約 50m程の間に営まれている。境内には、薬師堂の他各種の建物が建ち、境内最奥部には大型宝篋印塔の開山塔及び大燈塔（正慶元年（1332 年）建立の重要文化財）他、歴代住持の墓塔が安置され、寺

院の聖域を形成している。境内全体が山稜部の裾を切り落として谷を広げた状況をよくとどめ、境内奥から後背の山稜頂部（標高約 150m）までが連続する地形は、鎌倉の寺院の中でも、最も幽玄かつ静寂な宗教空間の特徴を保持している。また、百八やぐら群が存在する背後の山稜部も含め、覚園寺は昭和 42 年（1967 年）に境内全域が史跡に指定されている。

覚園寺では８月 10 日に施餓鬼会が行われ、同日、黒地蔵（重要文化財木造地蔵菩薩立像）の縁日も行われる。「くらやみ参り」とも呼ばれ、真夜中に、黒地蔵が祀られている地蔵堂で、亡くなられた方々の冥福と現在生きている我々の健勝を祈願する法要が行われる。大きな香炉に参拝者の捧げる線香の煙が盛んに上がる。お参りは早いほど良いといわれており、暗いうちから朝参りをする人もいる。お堂の奥に、錫杖（しゃくじょう）と宝珠（ほうじゅ）を持って立っているこの黒地蔵は、地獄に堕ちた罪人の苦しみを少しでも和らげようと、地獄の役人に代わって火を焚いたといわれ、そのために黒くすすけていて、いくら彩色しても一夜のうちに黒くなってしまうと伝えられており、「火焚き地蔵」とも呼ばれている。

（エ） 四万六千日詣り

室町時代以降、月に一日設けられた「功徳日」と呼ばれる縁日に参拝すると観音菩薩の多大なるご利益が得られるとの信仰が広がり、特に千日分の功徳が受けられるとされた旧暦７月 10 日の参拝は「千日詣り」と呼ばれた。さらに江戸時代になるとそのご利益は四万六千日（約 126 年分）に相当するといわれるようになり、現在の鎌倉では、８月 10 日になると、早朝から長谷寺等市内の観音霊場を巡礼する「四万六千日詣り」が多くの人々の間で行われている。

写真2-46　長谷寺（長谷観音）

（オ） お十夜

お十夜は、10 月 12 日の午後から 15 日の朝まで続けられる盛大な行われる念仏会（おこなわれるねんぶつえ）で、鎌倉では光明寺で行われる。

光明寺は、仁治元年（1240 年）に、第四代執権北条経時が浄土宗三祖然阿良忠（ねんなりょうちゅう）を開山に開創した蓮華寺（れんげじ）を起源とし、寛元元年（1243 年）に現在地に移築し光明寺と改称したとされるが定かではない。室町時代には第九代住職観譽祐崇（かんよゆうそう）によって中興され、明応４年（1495 年）には後土御門天皇（ごつちみかどてん）より勅願寺（ちょくがんじ）に定められており、江戸時代には、浄土宗の関東十八檀林の第一位の寺として栄えた。現在は、浄土宗大本山天照山光明寺と号する。

東に山稜部が迫る境内には、山門、本堂、日向延岡藩主内藤家歴代の墓所などが所在し、本堂は重要文化財に指定されている。

写真2-47 光明寺
（昭和 36 年(1961 年)）

写真2-48 光明寺（現在）

「お十夜」は、もともとは宮中で行われる行事であったが、光明寺の観譽祐崇が、宮中での十夜法要を勤めたことにより、後土御門天皇が光明寺で十夜法要を行うことを許したものである。

写真2-49 お十夜

この十夜法要は平安時代に唐から比叡山に伝わったもので、「人間の住む世の中で、十日十夜の間念仏を唱えれば、仏の住む極楽にいて千年間修行を実践するよりもまさる。」という念仏会の教えを基にするものと考えられている。

光明寺の「お十夜」は特に著名で、12 日午後の献茶に始まり、15 日朝の結願法要で終わるが、その間に様々な法要や説経、施餓鬼会や練行列、雅楽奉奏や稚児礼讃舞などが行われ、境内には露店が並ぶ。

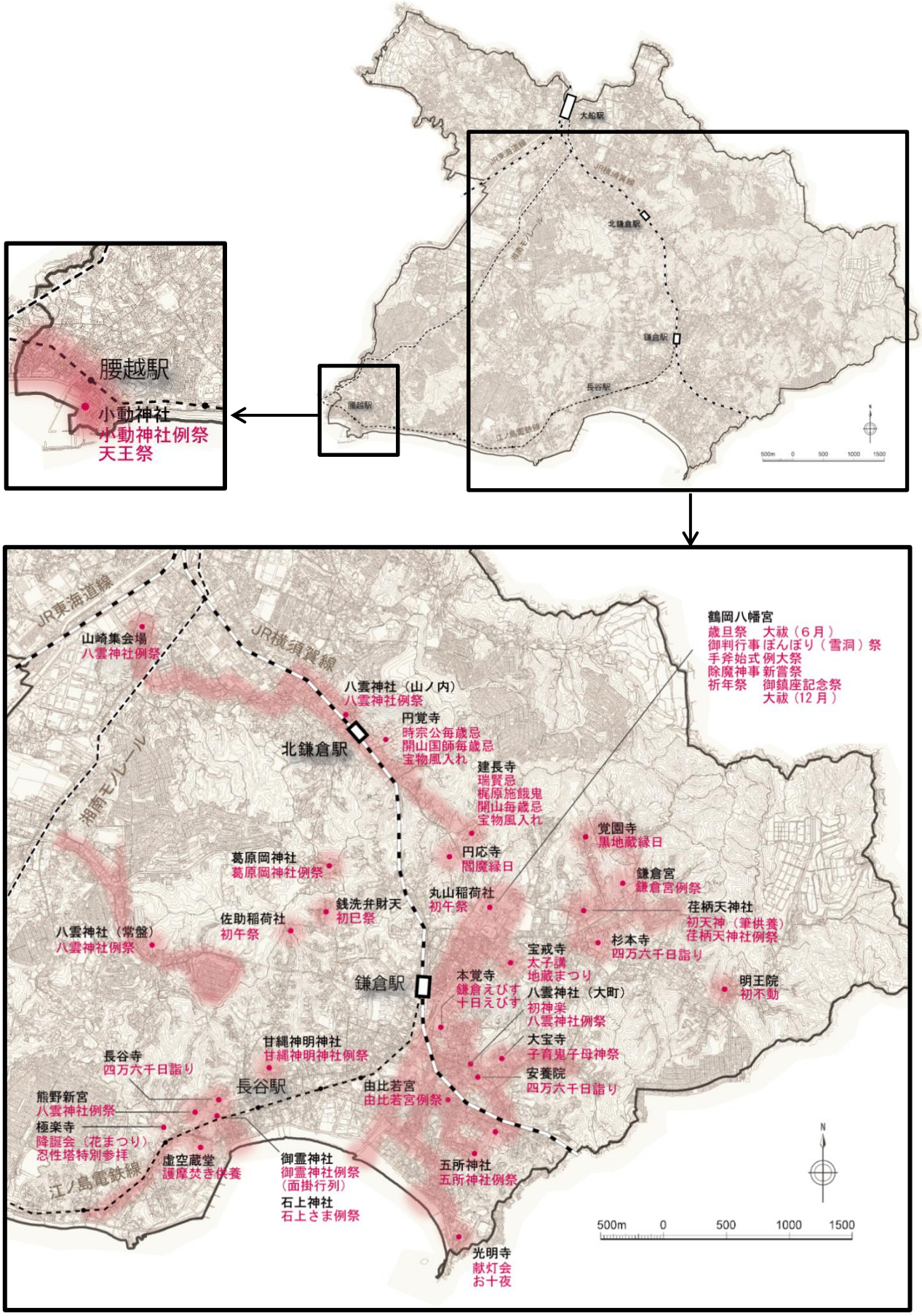

図2-6　社寺における祭礼・行事の市街地への広がり

エ　鎌倉の歴史的風致の礎

源頼朝が現在の位置に鶴岡八幡宮を建立し、この場所を中心として各方面に延びる道路網を整備する中で、周囲の山稜部に造営した切通を交通の要衝として支配するため、主要な街道の山際には多くの社寺が配置されていった。加えて、この時代の社寺は、幕府と強いつながりを持っており、周囲の山稜部に入組む谷戸が幕府関係者の領地であったことから、鎌倉各所の谷戸は境内地として開削され、多くの寺院が建立された。一方、民衆の間で広がりをみせた宗派の寺院については、主に庶民の生活の場となる街中に境内地を確保し寺院を建立していった。これらの社寺の多くは、大正 12 年（1923 年）の関東大震災や昭和 16 年（1941 年）に始まる太平洋戦争など、度重なる困難を乗り越え、今もなお「生きている歴史的遺産」として面的な広がりを見せながら、鎌倉の各所で宗教活動を続けている。

近年では、古式に則（のっと）った祭礼や伝統行事を執り行っているほか、宗教・宗派の別にとらわれず、鎌倉の宗教者が一堂に集い、東日本大震災の被災者の追悼と復興を祈願するなど、新たな活動も展開されている。

また、こうした活動の舞台となる社寺境内の歴史的建造物は、周囲を取り囲む豊かな緑と一体となって静寂な宗教空間を形成し、季節の花々や草木の色、香りなどが訪れる人々に安らぎを与えるとともに、日々営まれる読経の声、鐘の音、四季折々の伝統行事を担う人々のかけ声などと相まって、鎌倉の歴史や文化の奥深さを感じさせている。

さらに、社寺は、一つの歴史的風致を形成する重要な要素であることだけに止まらず、古来この地で行われてきた漁業に関連する伝統行事の担い手として、近世には参詣旅に始まる遊山の対象として、近代以降は別荘地や常住の地における古都の風情を醸し出す歴史的遺産として、戦後には緑地保全運動のきっかけの場として、それぞれの時代における人々の活動と密接な関わりを持ちながら、鎌倉における全ての歴史的風致の礎となっている。

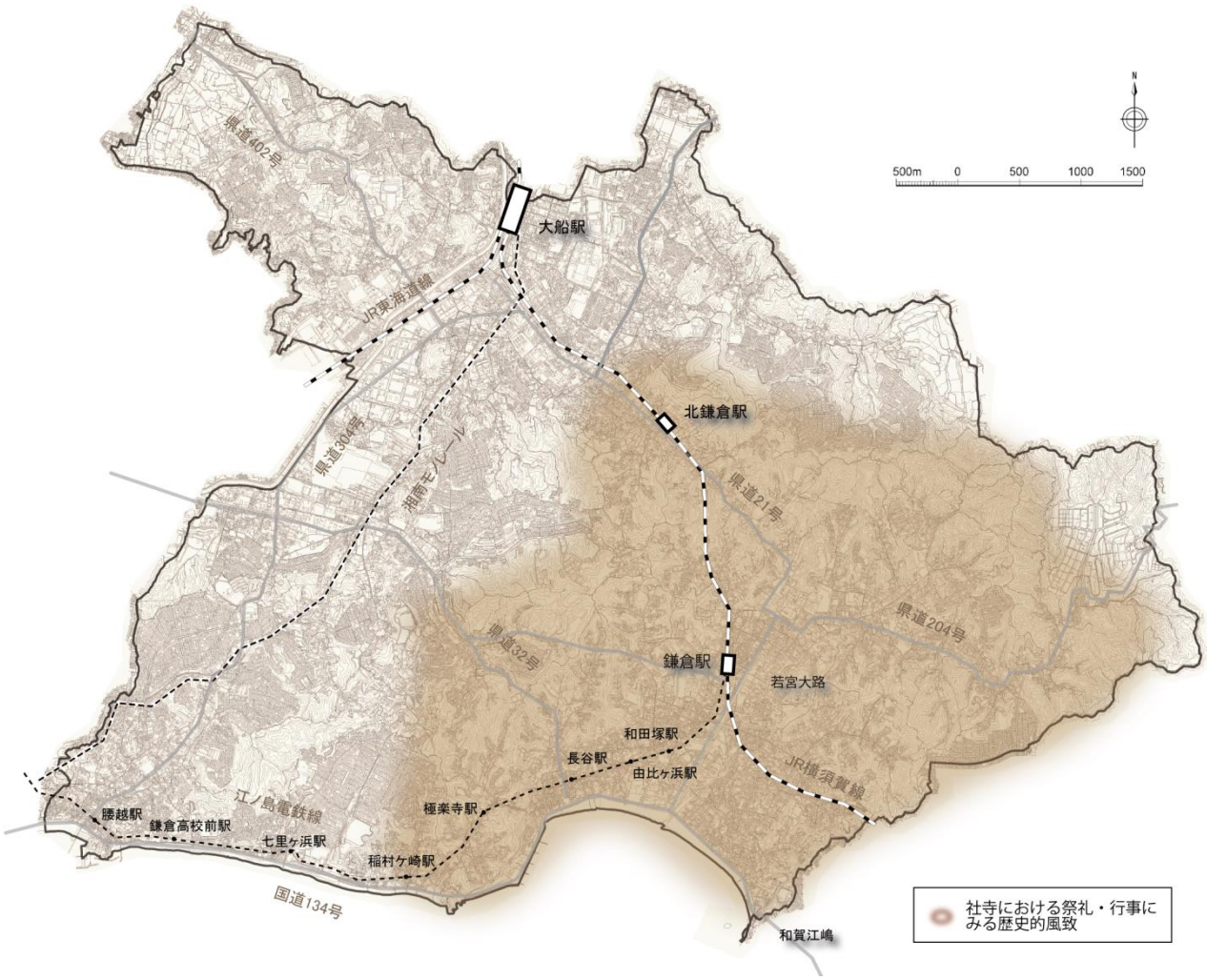

図2-7　社寺における祭礼・行事にみる歴史的風致の範囲